

## パウロは「異邦人」の使徒か

— ローマ人への手紙一章五節の *τῶν ἑθνῶν* の翻訳と解釈をめぐる諸問題 —

扇 田 幹 夫

### I

ローマ人への手紙一章五節の *τῶν ἑθνῶν* は、一般に「異邦人」と訳されてほとんど異論のないところとされている。<sup>(1)</sup> それは *τῶν ἑθνῶν* の慣用的な意味として定着しているばかりでなく、パウロ自身もその語を明らかに慣用にしがって「異邦人」の意味に用いている例がみられる。<sup>(2)</sup> また、たとえ前後の文脈から、パウロが慣用を破って本来の「諸国民・民衆」という意味に用いたと考えられる場合があるとしても、<sup>(3)</sup> パウロ自身は自らの使徒としての使命を「異邦人」に福音を宣べ伝えることとして自覚していたと考えられ、また、彼が実際にパレスチナの地を遠くはなれて「異邦人」の地で宣教活動を展開した「異邦人の使徒」であることは、いはば既定の事実であるともみなされているからである。<sup>(4)</sup>

したがって、「パウロはたして異邦人の使徒か」という根本的な問いを含む小論の問題は、直接的には、まずパウロの手紙の翻訳において *τῶν ἑθνῶν* を一義的に「異邦人」におきかえて訳すことの妥当性を問うものでなければならぬ。そしてつぎに、その解釈上のうらづけとして、パウロの宣教活動の実際と使命の自覚において、*τῶν ἑθνῶν* は、パウロにとって、はたして何を意味するものであったのかを説明するものでなければならぬであろう。

ここでは、はじめにパウロの宣教活動は「異邦人」に向けられたものであったのであるかという問題について検討し、つぎにパウロ自身の証言をもとに、パウロは自らの使命をともに「異邦人」のためのものとして自覚していたのであろうかという問題を検討する。その過程で、上記の翻訳と解釈の問題は、おのづから明らかにされるであろう。<sup>(5)</sup>

## II

パウロが、小アジア、マケドニア、アカヤを中心とするいわゆる「異邦人の地」にその活動を展開したということ、および、彼によって建てられたそれらの地域の諸教会から、のちに有力な異邦人教会が発達したという事実は、あらゆる観点からみて、ほぼ史実に相違ないことは、あらためて論じるまでもないであろう。

しかし、ここで問題となるのは、パウロが、当時のパレスチナのユダヤ人から見て「異邦人の地」においてその活動を展開したということから、ただちに彼は「異邦人の使徒」であり、「異邦人」をその宣教の対象としていたといえるであらうかということである。

ヨセフスの『古代史』などにもつくづく推定によれば、当時のイスラエル民族の総人口は約四五〇万人と考えられ、そのうち、アンテオキアやダマスコを中心とするシリアと、アレキサンドリアを中心とするエジプトには、それぞれ約一〇〇万人が居住していたといわれる。さらに、古い歴史をもつメソポタミヤ地方のユダヤ人や、小アジアからギリシア、ローマ、さらにはイスパニアにまで散在していたディアスポラのユダヤ人の総人口は、明らかにパレスチナ本土の人口をはるかに上まわり、その数倍に達していたといわれる。<sup>(6)</sup><sup>(7)</sup>

したがって、パウロが「エルサレムとユダヤ」の地を遠くはなれて、異邦人の地に活動の世界を求めたという事実

は、必ずしも彼が「異邦人」を、その宣教活動の直接の対象としたことにはならないであろう。彼が「ディアスポラのユダヤ人」を求めて、それらの異邦人の地に赴いたという解釈もできるのである。

パウロが、はじめユダヤ人に福音を説く試みをしたのちに、彼らの反発にあい、ユダヤ人を捨てて、ついに異邦人に福音をつたえる者となったという「異邦人の使徒パウロ」のイメージは、「ルカー使徒行伝文書」の著者が好んで印象づけようとするものである。しかもそれは、新約聖書正典の記述にもとづくパウロ像として、旧くからキリスト教におけるパウロ理解の形成に重要な役割をはたしてきた。<sup>(8)</sup>

しかし、ユダヤ人から異邦人への対象の推移をつたえるそのような記述は、使徒行伝の中のいわゆる「教説」<sup>レイト</sup>と「まとめの句」<sup>スミマリウム</sup>の中にみられるものである。現代の文献批評の多くは、それらが著者の作品構成のための意図を反映するものであって、ほとんど歴史的事実をつたえるものではないことを明らかにしている。<sup>(9)</sup>

最近のこの分野における研究によれば、パウロ以前にも、また、パウロと並行しても、異邦人への伝道活動は、ヘレニズム・ユダヤ教の伝統をうけて、多くの人々によっておこなわれたのであり、それら初代の異邦人伝道活動家の中において、パウロの存在は目立たないものであった。また、彼の伝道活動の実践的效果は、必ずしも使徒行伝の記述から想像されるような目ざましいものでもない。むしろパウロは、その難解で独特な福音宣教のゆえに、孤立しがちな存在であり、教会の秩序ある現実的發展のためには「問題の人物」として位置づけられていたことが知られている。<sup>(10)</sup>パウロによって建てられた教会が發展して、のちにキリスト教世界における重要な地位を占めるようになるのは、はやくとも七〇年以後のことであり、それにはパウロと並んで、また彼の後に、それらの諸教会を指導して有力な教会に育てあげた異邦人キリスト者の努力があったのである。<sup>(11)</sup>

このように、異邦人の地におけるパウロの宣教の対象が、必ずしも「異邦人」に限られないとすると、異邦人の地でパウロが直接にその宣教の対象としたものは誰であったのか。使徒行伝十六章から十八章にかけての、いわゆるパ

ウロの第二伝道旅行の記述によれば、パウロは、ピリピからテサロニケ、ペレア、アテネ、コリントをめぐって各地で福音をひろめ、やがて小アジアのエペソに退いている<sup>(12)</sup>。その際パウロは、まずユダヤ人の集るところに現れ、ユダヤ人の会衆にたち交わってそこに集る「神を敬う人々」を含む各地の会衆に福音を宣教している。会堂のある町では、ほとんど例外なく、まず会堂に入って福音を説き、ユダヤ人の反感、妨害にあつて、やむなく会堂から追い出されるまでは、そこにとどまっているのである。

使徒行伝のつたえるパウロのこのような「会堂からの宣教」のくりかえしの描写については、この部分もまた、すでにみた使徒行伝の他の部分と同じく、「パウロはまずユダヤ人に説き、つぎに異邦人にむかった」とする「ルカ―使徒行伝文書」著者の図式的描写に属するものとして、史実を確認するための資料としてはほとんど意味をなさないとする解釈もみられる。<sup>(13)</sup>しかし、この個所にみられる伝道活動の記録の一部は、使徒行伝の諸資料の中で、もっとも史実に近い内容をつたえるとされる部分に属すること、<sup>(14)</sup>また、その記述内容が、「ルカ―使徒行伝文書」著者の図式構成のためのものと考えられる部分の内容とあきらかに矛盾する行為をつたえていること、<sup>(15)</sup>また、個々の土地における活動の描写は、必ずしも画一的ではなく、歴史的事実と一致する他の諸条件の描写による変化を含んでいること<sup>(16)</sup>などから、この部分が伝えている内容は、著者の意図を反映する構成部分とは明らかに区別されなければならないであろう。

パウロが各地で、まずユダヤ人の会堂からその宣教活動を始めたことを伝える使徒行伝の描写の「くりかえし」は、著者の図式構成意図による創作ではなく、むしろ、事実がまさしくそのようであったために、ある点では著者自身の意図に反する内容のものであるにもかかわらず、そのくりかえされた事実を記述しなければならなかったと解されるのである。パウロが、その手紙の中で、彼の宣教の対象となっている人々について語る場合に、「ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも」ということばを、しばしば用いていることは、使徒行伝が伝える「会堂からの宣教」の描写の事実

性をうらづけるものであらう。<sup>(17)</sup>

パウロの宣教活動の対象は、必ずしも「異邦人」ではなかったのではないかということは、さらに、パウロの残した後期の手紙であり、彼のもっとも円熟した思想をつたえろと考えられる『ローマ人への手紙』において、ユダヤ人の救いの問題が重要な位置を占めていることや、その論述の様式、また、この手紙を書き終えた後のパウロの行動についての考察からも明らかにされるであらう。

ローマ人への手紙の全体がローマにおけるユダヤ人の存在を強く意識したものであることは、多くの注解者によって注目されてきた。ほとんどすべての注解書が、その緒論の中で「ローマにおけるユダヤ人」について論及していることは、その外面的なあらわれといえるであらう。<sup>(18)</sup>

パウロが、ローマ人への手紙を執筆する際に、いかにユダヤ人の存在を強く意識していたかは、そこに含まれる個々の論点についてのパウロの論述・論証の仕方の中に、もっともよくあらわされている。パウロは、ローマ人への手紙前半における彼の福音理解の提示にあたって、ほとんど図式的ともいえる論述の様式をもちいて、はじめに「もはやユダヤ人もギリシヤ人もない」すべてのものに等しくかわるべき福音としての「信仰による救い」を一般的に提示し、つぎに、同じ内容を「義」と「律法」にかかわる事柄としていいかえ、ユダヤ教の伝統に即して論証しようとして試みているのである。<sup>(19)</sup>

さらに、ローマ人への手紙全体の内容構成についての考察から、いわゆる「ユダヤ人問題」を論じる九章から十一章までの部分が、きわめて重要な位置を占めるものであることが注目されるであらう。<sup>(20)</sup> その観点によってみるならば、福音によって明るみに出された「すべて」が全く等しくされる状況の中で、ユダヤ人パウロにとっては、肉につける一人の人間として誰でもが各々その置かれた場においてそうあるように、自らの同胞の救いの問題が、もっとも気がかりな課題として自覚されていたのである。<sup>(21)</sup> この立場からは、パウロがユダヤ人の立場を見捨てて「異邦人」の使徒

になったという理解は、ローマ人への手紙を書いたパウロの意図とその使命の自覚を、いちぢるしく見誤まる見解であるといわれなければならないであろう。

さらにまた、パウロがコリントにおいてこの手紙を書いたのち、エルサレムの教会へ献金を持参する務を他人の手に委ねることをせず、また、一刻もはやくローマに至り、「全世界」に福音をひろめようとするパウロ自身の立てた計画の実現の時を、あえて延期してまで、多くの危険の予想されるエルサレムに、自ら赴いた真意は何であったのかというボルンカムの問いかけは、<sup>(22)</sup>パウロの生涯と思想にとって「ユダヤ人」の存在の占める重さを暗示するものであろう。

パウロが、小アジア、マケドニア、アカヤにかけて「異邦人の地」で活動したという事実は、必ずしも彼の宣教が一義的に「異邦人」を対象とするものとはいえないことは、以上の考察から明らかである。事実はおそらく、パウロは、異邦人の地にあつて、ディアスポラのユダヤ人の存在する町々をたずね、「ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも」その福音を宣教したということであろう。

「異邦人の使徒」のことばとしては、奇異な印象を与えるものとしてしばしば注目されてきた「わたしはエルサレムから始まり、巡りめぐってイルリコに至るまで、キリストの福音を満たしてきた」というパウロのことばも、<sup>(23)</sup>以上の観点から、もっともよく理解されるであろう。

### III

ローマ人への手紙一章五節において、パウロは、自らの使徒としての使命を「すべての異邦人を信仰の従順に至らせる」ことであると述べている。ここで「異邦人」と訳されている *τὰ ἔθνη* は、本来ギリシヤ語で「国民、民族、

民衆」を意味する *to ebros* の複数形であり、それが聖書で「異邦人」と訳されるのは、主として七〇人訳聖書において、ヘブル語の *roni* に相当する訳語として使用されて以来の慣用によるものである。<sup>(26)</sup> 一般的にはパウロはこのことばを当時の慣用にしたがって「ユダヤ人」に対する反対語として用いていると解され、ほとんど一義的に「非ユダヤ人」を意味するものとして理解されてきた。パウロは実際にその手紙の多くのところで、明らかにこの慣用にしたがってこのことばを用いている。<sup>(27)</sup>

しかし、パウロにとって、この *to ebros* は、そのすべての用例にわたって一義的に「異邦人」を意味するものであったのであろうか。<sup>(28)</sup> パウロは一般的描写においては、確かにしばしば「ユダヤ人」と「異邦人」について語るが、しかしその反面、その使命の対象となる「すべて」を語る場合には「ユダヤ人も異邦人も」という表現をとらない。そのような場合に彼が用いることは、単に *to ebros* であるか、あるいは「ユダヤ人もギリシヤ人も」、または「ユダヤ人をはじめギリシヤ人も」という表現であることが、まず注目されなければならないであろう。<sup>(29)</sup> また、パウロにおける *to ebros* を「一義的に「異邦人」とすることは、さきに検討した彼の宣教活動の対象の実際とも相反することが指摘されるであろう。

したがって、パウロの「使徒としての自覚」を、これらの事実と矛盾なく解明するためには、パウロにおける *to ebros* は一義的に解釈されるべきではなく、むしろ、二重の意味を含むことばとして理解されなければならないのではないか、と問うことができるであろう。つまり、パウロが事柄を一般的に描写する場合に慣用にしたがって用いる「異邦人||非ユダヤ人」としての意味と、彼がその使命の対象を語る場合の「すべて」のものにかかわる意味とは区別して理解されなければならないのではないか。パウロにおける「使命の自覚」の表現としての *to ebros* は、一方において「すべて」という抽象的な一般的表現ともなり、また一方では、「ユダヤ人とギリシヤ人」という具体的な内容の指示にも通じる用語として、きわめてパウロ的な独自な意味で用いられていると考えられるのである。

パウロが一般に用語の選択・使用に際して独自の態度を示していることは、よく知られた事実である。ストア派を中心とする当時のギリシヤ思想に接し、その用語と思われるものを自らの語彙の中にとりいれながら、独自の用い方をし、また、七〇人訳からのギリシヤ語の慣用についても、ある場合は、もっとも広く用いられている用語を避けて、自ら選り取った日常用語に新しい宗教的意味を付与して用い、また、ある場合には「義」(δικαιοσύνη)の例に典型的にみられるように、慣用されている用語をそのまま用いながら、その意味内容には慣用を超える新しい意味をもたせている。<sup>(30)</sup>

このように、パウロが、その用語の使用において、しばしばきわめて主体的な自由な態度を示していることは、当然 τὰ ἑθνη の場合にも、それが必ずしも慣用ど通りに一義的に「異邦人」を意味することはとして用いられているとは限らないことを示唆するものであろう。ローマ人への手紙一章五節の例にみられるように、このことは、とくに ἑθνη (すべて) などの修飾語と結びついて用いられるような場合には、前後の文脈についての判断によって、それを「諸国民」の意味に訳す翻訳がこれまでに幾度かおこなわれている事実も、そのことをうらづけるものであろう。<sup>(31)</sup>

このような事実にもかかわらず、ルター訳以来のドイツ語への翻訳をはじめ、多くの標準的近代語訳や個人訳の中で「異邦人」の訳語が選ばれているのは、ガラテヤ人への手紙などとの照応をもとに、パウロは、自らの使徒としての使命を明らかに「異邦人」のためのものとして自覚していたとする「解釈」によるものである。しかし、そのような解釈にも、はたして疑問をさしはさむ余地はないであろうか。

パウロの手紙の中で、パウロが自らを τὰ ἑθνη の使徒であると述べている箇所は、ローマ人への手紙一章五節、十一章十三節、十五章十六・十八節、ガラテヤ人への手紙一章十六節、二章八節である。そのうちローマ人への手紙十五章十六・十八節は、内容的にローマ人への手紙一章五節に対応するものであって、そこに独自の意味はなく、ローマ人への手紙一章五節の検討に含めることができるであろう。また、ガラテヤ人への手紙一章十六節は、ユダヤ主



義者による批判に対して、パウロが自分のキリスト教受容のさいの召命を語るものであるが、その書かれた情況の違いにもかかわらず、召命において彼が受けとめた使命の内容は、ローマ人への手紙一章五節に、より簡潔に表現されているものと、基本的に同一であって、何ら別な要素を加えるものではない。

このように、ローマ人への手紙一章五節<sup>(35)</sup>は、パウロの使徒としての使命の自覚をもっとも冷静な判断にもとづいて一般的に表現したものと考えられるが、ガラテヤ人への手紙一章十六節の場合と同じく、この部分についての考察からだけでは、*καὶ ἑαυτοῦ* の独自の意味についての決定的な手がかりは得られない。このことは、あまりに一般的な表現であるために、パウロの使命の自覚についての総合的判断や、他の個所についての考察にもとづいて「異邦人」と訳すことも、また、すでにみたように「諸国民」とすることもできるのである。

ただここでは、口語訳聖書で「すべての異邦人を」と訳されている（ガラテヤ人への手紙一章十六節では、同様の表現が「異邦人の間に」と訳されている）ことは、ギリシャ語本文では、直接に「異邦人を」という表現ではなく、むしろ「異邦人の間で」と訳される前置詞 *ἐν* をともなう表現であることが注意されなければならない。そのような表現をとることによって、パウロは、人々が仮りに、彼の用いる *καὶ ἑαυτοῦ* を慣用にしがたって「異邦人」の意味に理解しても、パウロの使命の対象は「異邦人」に直接にむけられているのではなく、「異邦人の間で、ユダヤ人にもギリシャ人にも」、あるいは「聖地パレスチナをはなれた異邦人の地で、ユダヤ人にもギリシャ人にも、もろもろの民にも」という意味にも解釈できる余地をのこしていると考えられるからである。

パウロの使徒としての自覚を、もっとも明確に「異邦人」のためのものと規定しているとされる個所は、ガラテヤ人への手紙二章八節である。<sup>(36)</sup>パウロはここで、ペテロの使命が「割礼のもの」(*τῆς περιτομῆς*)を対象としているのに対して、自分のつとめは *καὶ ἑαυτοῦ* にむけられていることを認めている。これはほぼ決定的な証言とみなされ、パウロの使命の自覚にかかわる *καὶ ἑαυτοῦ* の翻訳を「異邦人」とする解釈のよりどころとなってきた。<sup>(37)</sup>しかし、はたしてこ

の個所でのパウロの証言は、それほど一義的に明確なものであるうか。パウロのここでの表現は、読み方の視点を移しかねることによって、これまでの解釈とはまったくことなつた意味を含むものであることが明らかにされるのではないか。

七節と八節の表現の違いが、まず注意されなければならない<sup>(38)</sup>。七節は、人々が一般的に理解している使徒のつとめの分担を客観的に記述したことばである。そこで「彼らが……認めた」(ἡσάμεθα) 事柄は、ペテロは「割礼の者」へつかわされており、パウロは「無割礼の者」(ἡ ἀκροβουλία) につかわされているということであつた。これに対して八節は、七節で述べられたような「人々が認めている事柄」を、パウロが、ここでは「自分の立場」で受けとめなおして確認していることばである。その際にパウロは、ペテロに託された使命は「割礼の者」にむけられていることを、人々のことばどおりに認めながら、しかし、自分に委ねられた使命の対象を確認するに当っては、人々の認めようとする「無割礼の者」ということばをそのまま用いることをしないで、それを *καὶ ἡμεῖς* という「自分のことば」におきかえているのである。パウロが「割礼の者」と「無割礼の者」を対句として使用する例は、他にもみられるが、「割礼の者」ということばを「異邦人」ということばの対句として用いる例はまれである<sup>(39)</sup>。したがってパウロによるこの用語のおきかえは、単に無意識の口ぐせや不注意によるものではなく、そこに深く秘められた「使命の自覚」が表明されていると解釈することができるであらう。

この *καὶ ἡμεῖς* は、六節からの文脈をたどることによって、この八節のいいかえの中に、使命の自覚にともなうパウロの秘められた「自覚」が表明されていると解釈されることによって、いっそうパウロの使命の自覚の真意をつたえるものと受けとられる<sup>(40)</sup>。つまり「彼らがどんな人であつたにしても、それは、わたしには全く問題ではない」といわれる「かの『重だつた人たち』」の判断では(彼らはパウロの眼からみて、いまだに人々を割礼の者と無割礼の者とに分けへだてて考える立場を超越していない) ペテロが割礼の者へ、そしてパウロは無割礼のものへ、というような

平面的な役割分担の考え方はやむを得ないであろう。しかし、「人を分けへだてなさない」神の召命を受けて、直接その神につかえる者となったパウロにとっては、彼らはそれに気づかないし、また知ることでもできないであろうが、自分にとって、この神から託されたつとめは、もはや「無割礼の者」に限定されるべきものではない。そのようなパウロの使命の対象を語ることはとして *τὸ εὐαγγέλιον* はその二重の意味のゆえに、もっとも適切な用語であったのである<sup>(41)</sup>。そこには、ユダヤ人とギリシャ人を具体的な対象とするともに、無限定な「すべて」にむかってひらかれたつとめを己のものとするパウロの一種の自負をとまなう使命感が読みとれるのである。

人々は、ペテロを「割礼の者」(選ばれた神の民イスラエルの栄光をになう者)につかわされたものと規定することによって、そのつとめを「異邦人」につかわされたパウロのつとめの上に立つものと自認するであろう。しかし、パウロは、自分の使命の対象を、「無割礼の者」ではなく *τὸ εὐαγγέλιον* として受けとめることによって、単に「部分」あるいは「より劣った部分」に対するつとめとしてではなく、むしろ「すべて」に対する使命として、明らかにより重要なつとめを神から託されていることを自覚していると解されるのである。使徒会議の決定のあったのちに、パウロが「ケパ」を譴責するというような行為のあったことも、単にパウロの社会的、教育的背景の優越にもとづく自負によるものとしてではなく、むしろ、パウロの側におけるこのような使命の自覚があったものとして、はじめて充分に説明されるであろう<sup>(42)</sup>。

釈義上おおくの問題をのこしてきたローマ人への手紙十一章十二節―十四節の「わたしは異邦人の使徒なのであるから、わたしの務を光榮とし、どうにかしてわたしの骨肉を奮起させ、彼らの幾人かを救おうと願っている」ということも、上記の考察によって示されたところにしたがって *τὸ εὐαγγέλιον* に二重の意味をみとめることによって、もっとも無理なく理解できるものとなるであろう<sup>(43)</sup>。

#### IV

これまでパウロは異邦人の使徒かという問題をめぐって、史実と証言という二つの視点から検討をこころみてきた。その結果、パウロの伝道活動の実践についての考察から総括的にいえることは、彼はユダヤ人を排して異邦人をその宣教の対象としたのではなく、まさしく「ユダヤ人とギリシヤ人に」、あるいはむしろ「ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも」その福音を説いた、ということである。

パウロは、小アジアからギリシヤにかけてディアスポラのユダヤ人居住地のある町々を重点的におさえ、さらに西方の重要なディアスポラの所在地でもある帝国の首都ローマにむかおうとしていた。パウロがその活動の最後まで強くユダヤ人を意識し、ユダヤ人の救いを問題としていたことは、ローマ人への手紙における「ユダヤ人問題」の占める位置からも、また、パウロのその後の行動からも推定される。

したがって、パウロの実践を通してみるかぎり、彼を一義的に「異邦人の使徒」として理解する立場は成り立たないこと、また、パウロの使徒としての対象から「ユダヤ人」をはくことは、ほとんど不可能に近いことが示された。このような事実についての考慮なしに、パウロを「異邦人の使徒」と呼ぶことは明らかな誤解であろう。

つぎに、パウロの証言についての検討から、パウロにおける *ἑθνη* の意味は一義的ではなく、一般的な描写に用いられる慣用による「異邦人」の意味と、パウロが自らの使命の対象を語る場合の独自の意味とは、区別されなければならないことが示された。「無割礼の者」から意識的に区別して用いられた *τὰ ἑθνη* は、もちろん「ユダヤ人」をも含みうる概念でなければならない。

したがって、パウロの証言からも、伝統にしたがってパウロを「異邦人の使徒」と規定してしまうことは、パウロ

の真意にそむくことになるであろう、パウロは、その使命の自覚においても、決して単に「異邦人」の使徒ではなかったのである。

ところで、ここで注意しなければならないのは、自己の使命のもっとも深い自覚を述べるさいに、パウロは、あたかも人々の注意をそらすかのように、もっとも目立たない仕方ですれを表明しているという事実である。ローマ人への手紙一章五節とガラテヤ人への手紙一章十六節の *καὶ* をともなう表現では、彼がそこで用いる *καὶ* の意味を、人々は充分に理解しないであろうことを、あらかじめ予想しているかのようである。ガラテヤ人への手紙二章八節の「おきかえ」も、パウロは、あたかも何ごとも無いかのようにおこなっている。<sup>(4)</sup> そのおきかえによる違いをみとめることのできない者たちを誤解にゆだねているようにさえみえる。

パウロは、なぜそのような使命の自覚のあらわし方をしたのであるうか、それは弁解によって明らかにされるべきものではなく、「ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも」分けへだてなく福音を宣べ伝えているパウロ自身の存在と実践の中にすでに明らかにされていると考えたからであろうか。あるいは、それはパウロにとって神からの直接の召命にかかわる事柄であって、ただ黙して自らそれに従って生きかつ死すべき事柄として深く自覚されていたからでもあるうか。あるいはまた、かくされた「自負」のとげをつつむための配慮であったのか、いずれにしても、それは宗教的生のもっとも深い内面にかかわる事柄であって、他者がそれについて論証したり、確定したりしようとすべき事柄ではないという宗教的存在のもつ基本的構造にかかわる事実を、パウロは、ここでもっとも有弁に語っているかのようである。

パウロの「あいまいな態度」についての以上の考察は、パウロの使命の自覚にかかわる *καὶ* の翻訳と解釈の問題についての小論の結論に一つの方向を示唆する。つまり翻訳の問題としての *καὶ* は明確で決定的な解決を得ないであろうということである。実際には、おそらく「異邦人」にかえて「すべての人々」とおきかえる方が、誤解を

より少ない範囲にとどめることになるであろうという意味で、より適切な訳語とされる場合があるであろう。あるいは、それを「ユダヤ人とギリシヤ人」におきかえる方が、パウロの真意により近い訳語と考えられる場合もあるであろう。その含む意味は、いわゆる「神学」の問題として、パウロの神学思想の全体と、とくにその「すべて」の概念についての十分な理解をまっしてはじめて説明されるであろう。しかし、たとえその結果、「異邦人」にかえて「ユダヤ人とギリシヤ人」をおくことが、より適切であることが説明されたとしても、そしてまた、それが「諸国民」や「すべての人々」におきかえられたとしても、それらは、原則的には「仮りの用語」としての訳語であり、本来の意味の限定以上のものではあり得ないことを、パウロのあいまいさを含む人間的事実は語りつつけていると解されるのである。しかし、このように理解の枠を拡げることが、すでに狭義の「神学」の場をはなれた「宗教学・宗教史」的な試みであろう。そこでは、もはや訳語そのものの選択が問題ではなく、むしろ、一つの訳語を「固定化」してしまうことや、また、ひとたび「異邦人の使徒パウロ」という觀念が成立すると、パウロは、まさしく「異邦人の使徒」であって、それ以外の何ものでもありえないかのように、論理的整合性のみによって、その思想や人格を理解しようとする研究方法の全体が問題とされなければならないであろう。パウロ理解におけるこれまでの多くの誤解は、厳密な神学的概念規定の不充分さによるよりも、むしろ、その言語表現の宗教言語としての特性についての十分な方法的省察がなされなかったことによると考えられるのである。

このように、ローマ人への手紙一章五節の *καὶ ἐδοκίμασεν* の翻訳と解釈の提起する問題は、一方ではパウロの手紙全般にわたる専門的な立場からの釈義研究と、パウロにおける「すべて」の内容についての神学思想からの説明と、さらに、その思想説明における「ことば」と「概念」の位置についての宗教学的的方法論の問題に連続する。小論は、パウロにおける *καὶ ἐδοκίμασεν* の意味の重層構造の仮説によって、パウロ理解のための問題の所在を明らかにすることをもって一応その目的を達する。

- (1) 現在ひろく読まれている注解書のほとんどが「異邦人」の訳をこじている。その理由については、サンディーヘッドラムが ICCC の『ローマ書』で述べている立場が標準的である。cf. Sanday-Headlam, *The Epistle to the Romans*, Edinburgh: T. & T. Clark, 1902; C. H. Dodd, *The Epistle of Paul to the Romans*, London: Hodder and Stoughton, 1932; C. K. Barrett, *The Epistle to the Romans*, London: Adam & Charles Black, 1962. 松本治三郎『ローマ人への手紙』日本基督教団出版局、一九六六年。山谷省吾『ローマ人への手紙』新教出版社、一九六七年。その他。
- (2) cf. Schmidt, K. L., "ἐθνος, ἐθνικός" in Kittel's *ThWNT* II, Stuttgart, 1933—1974, pp. 364—372; Bauer-Arndt-Gingrich, *A Greek English Lexicon of the New Testament and other early Christian Literature*, Chicago: University of Chicago Press, 1957. だが、その例としてローマ人への手紙三章二九節、九章二四節、十五章一〇節をあげている。
- (3) 英訳の AV および最近の NEB に "nations" という訳がみられる。日本語訳では改訳聖書では「もうもろの國人」とわれ、もっとも新しい新改訳聖書では「(あらゆる) 国の人々」と訳されている。
- (4) このことは、さきにあげた注解書についていえるばかりではなく、ディベリウス、ムンク、シェプス、ボルンカムなど、パウロの生涯と思想についての代表的な著作についても同様である。ただ、ごく最近出版されたステンダルのパウロ研究は、異邦人の使徒パウロという理解を受けいれながら、斬新な視点からこれまでのパウロ理解のあり方について根本的な批判を含むものとして注目をひく。M. Dibelius, *Paulus*, Berlin: Walter De Gruyter, 1956. (ディベリウス／松山康国訳『パウロ』新教出版社、一九六六年) J. Munck, *Paul and the Salvation of Mankind*, Richmond: John Knox Press, 1959; H. J. Schoeps, *Paul, the Theology of the Apostle in the Light of Jewish Religious History*, London: Lutterworth Press, 1961; G. Bornkamm, *Paulus*, Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag, 1969; (ホルンカム／佐竹明訳『パウロ』新教出版社、一九七〇年) K. Stendahl, *Paul among Jews and Gentiles*, Philadelphia: Fortress Press, 1976.
- (5) 小論でとりあげる問題は、このようにきわめて根本的なものであるゆえに、その充分な解明のためには、釈義、神学思想、宗教史など多方面からの研究が並行してすすめられなければならないであろう。小論は、パウロを異邦人の使徒とするこれまでの一般的な理解に、根本的な問題のあることを提示することによって、それら一連の関連研究のための基本的な方向づけをなすものとなる。
- (6) Josephus, *Antiquitates Judaicae*, XIV vii; cf. Stern, M., "Diaspora" in *Encyclopedia Judaica* vi, pp. 8—20.

- (7) ボルンカム、前掲書、一九七〇年、三二頁。
- (8) ムンクのように、パウロの使徒の務めは究極的にはユダヤ人の救いに向けられていたとするような立場からも、「ルカー使徒行伝文書」の成立年代を初期のものとし、そのパウロ資料としての重要性を主張する例が見られることは、その伝統の根強さを示すものであろう。cf. Munck, J., *op. cit.*, 1959, p. 210.
- (9) 「レーデ」と「スンマリウム」の資料価値については、荒井献『使徒行伝』解説（『聖書の世界』第六巻、講談社、一九七〇年）三八七—三九一頁、トロクメ／田川建三訳、『使徒行伝と歴史』、新教出版社、一九六九年、二一六—二五〇頁、ディペリウス、前掲書、一六—一八頁、ボルンカム、前掲書、六—一五頁参照。
- (10) cf. Stendahl, K., *op. cit.*, pp. 68—70. トロクメ、前掲書、八一頁参照。
- (11) cf. Schoeps, H. J., *op. cit.*, p. 87.
- (12) 使徒行伝十六章十一—十五節（ピリピ）、十七章一九節（テサロニケ）、十七章十一—十四節（ベレア）、十七章十五—三十四節（アテネ）、十八章一—十七節（コリント）、十八章十八—二十三節（エペソ）。
- (13) トロクメ、前掲書、一六八頁参照。
- (14) ピリピ訪問の記述は、いわゆる「われら資料」に属する。荒井献、前掲論文、三九〇頁、竹森満佐一、「使徒行伝」（『新聖書大辞典』、キリスト新聞社、一九七一年）、六〇二—六〇五頁参照。
- (15) ボルンカムによれば、「レーデ」は使徒行伝の約三分の一を占め、二四の教説を含む。パウロは、その中で四度、ユダヤ人から異邦人へ方向を転じることを宣言している。（十三章四四—四七節、十八章五—七節、十九章八—九節、二八章三—二八節）しかし、そのうち、二八章を除く三度まで、その宣言の後、ただちにユダヤ人の会堂へ行き、ユダヤ人と論じ、ユダヤ人とギリシャ人とを信仰に導いたことが記され、十九章の後では、エルサレムへ行く決心をしている。ボルンカム、前掲書、九頁参照。
- (16) ピリピの町には会堂がなく、安息日にパウロは「祈り場があると思つて、川のはとりに行つた」（十六章十三節）。また、ペレアのユダヤ人は「素直であつて、心から教を受けいれ」、パウロに対して反抗することはなかった（十七章十一節）。
- (17) ローマ人への手紙一章十六節、十章十二節、コリント人への第一の手紙一章二—二四節、九章二〇節、十章三二節、十二章十二節、ガラテヤ人への手紙三章二八節参照。
- (18) cf. Sanday, W. and Headlam, A. C., *op. cit.*, 1902, pp. xvii—xxxvi.
- (19) ローマ人への手紙一章十六—十七節はその簡潔な典型であろう。同様の「くり返し」は、一章十八節—二章十一節に対して、



二章十二節—三章二十節が対応し、また、三章二節—三十一節に対する四章一節—二五節、五章一節—十一節に対する五章十二節、十二節—二十一節、その他の対応の構成にみることが出来る。

(20) cf. Stendahl, K., *op. cit.*, p. 4; Barret, C.K., *op. cit.*, p. 9.

(21) cf. Munk, J., *op. cit.*, p. 54; Leenhardt, F. J., *L'épître de St. Paul aux Romains*, Paris: Delachaux & Niestle, 1957, pp. 10—12. パウロがように「ユダヤ人問題」にかかわることができたということは、彼の民族的特権への執着を示すものではなく、むしろ、徹底して民族的差別をのりこえたパウロの「自由」の境地をあらわすものであらう。

(22) Bornkamm, G., *Das neue Testament*, Stuttgart: Kreuz-Verlag, 1971 (ホルンカム／佐竹明訳『新約聖書』新教出版社、一九七二年)一八二頁。

(23) ローマ人への手紙十五章十九節。ここでは、パウロが異邦人の使徒と自ら認めていたとすれば、なぜ「エルサレムから」としているのか、また、異邦人を直接の対象としていたとすれば「イェルリコに至るまで、キリストの福音を満たしてきた」という表現があまりに事実からかけ離れているのではないか、ということが問題となる。ホルンカム／佐竹明訳『パウロ、その生涯と使信』新教出版社、一九七〇年、九九—一〇〇頁参照。

(24) Bertram, "People and Peoples in the LXX" in Kittel's *ThWNT*, II, 1933—1947, pp. 364—369.

(25) 注(2)参照。

(26) パウロはローマ人への手紙の中で二七回 *τὰ ἔθνη* といふことばを用いているが、そのすべてが明らかにユダヤ人と対比して用いられる「非ユダヤ人」であるとはかぎらない。単独で用いる場合には、ユダヤ教的価値意識を伴わない「諸国民」とも、また、彼の宣教の対象である「すべて」を含む人々とも解釈できる場合がある。ローマ人への手紙一章五節、一章十三節、十五章十六節、十五章十八節参照。

(27) ローマ人への手紙一章十六、その他、注(17)参照。

(28) cf. Schoeps, H. J., *op. cit.*, pp. 32—34; Pohlenz, M., "Paulus und die Stoa", *ZNW*, 42 (1949), pp. 69—104.

(29) cf. Schoeps, H. J., *op. cit.*, pp. 35—36; O. Michel, *Paulus und seine Bibel*, Gütersloh, 1929, pp. 83ff.

(30) その他、*πρίοτις* と *δακρυϊα* に関連したことばは、cf. Bultmann, "*πρίοτις* and *πικτεῖν* in Paul" in Kittel's *ThWNT*, VI, pp. 217—222; Boyer, "*δακρυϊα*" in Kittel's *ThWNT*, II, pp. 81—93; Schoeps, H. J., *op. cit.*, pp. 29—31; Leisegang, H., *Paulus als Denker*, Leipzig, 1923, p. 49.

- (31) 注(3)参照。
- (32) 注(1)参照。
- (33) *eis tō einai me leitourgon Χριστοῦ Ἰησοῦ eis τὰ ἔθνη,……ou γὰρ τοιμήσω τε λαλεῖν οὐ κατεργάαστο Χριστός δι' ἐμὸς εἰς ὑπακοὴν ἔθνων,……* (「このように恵みを受けたのは、わたしが異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり……わたしは、異邦人を従順にするために、キリストがわたしを用いて……働かせて下さったことの外には、おそく何も語らうとは思わぬ」) (注の日本語訳は『口語訳聖書』による。)
- (34) *ἀποκαλύψαι τὸν υἱὸν αὐτοῦ ἐν ἐμοὶ ἵνα εὐαγγελίζωμαι αὐτὸν τοῖς ἔθνεσιν,……* (「異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしの内に啓かし給へた者……」)
- (35) *……eis ὑπακοὴν πίστεως ἐν πᾶσιν τοῖς ἔθνεσιν ὑπὲρ τοῦ ὀνόματος αὐτοῦ,……* (「その御名のために、すべての異邦人を信仰の従順に導かせ給へた者……」)
- (36) *ὁ γὰρ εὐεργήσας Πέτρος εἰς ἀποστολὴν τῆς πεποιμένης ἐνέργησεν καὶ ἐμοὶ eis τὰ ἔθνη,……* (「このように、ペテロに働きかけて割礼の者への使徒の務につかせたかたは、わたしにも働きかけて、異邦人につかわして下さったからである」)
- (37) cf. Sanday, W.—Headlam, A. C., *op. cit.*, p. 11; Barret, C. K., *op. cit.*, p. 21.
- (38) *ἀλλὰ τοῦναντίον ἰδόντες ὅτι περιστεύμαί τὸ εὐαγγέλιον τῆς ἀκροβυστίας καθὼς Πέτρος τῆς πεποιμένης, (「われわれは、彼らは、ペテロが割礼の者への福音をゆたならせられた」) わたしには無割礼の者への福音がゆたならせられた者(「われわれ」)*
- (39) cf. Schmidt, K. L., “ἀκροβυστία” in Kittel’s *ThWNT*, I, pp. 225—226; Meyer, “πεποιμένη” in Kittel’s *ThWNT*, VI, pp. 81—84.
- (40) *ἀπὸ δὲ τῶν δοκούντων εἶναι τὴν ὁποῖον ποτε ᾔσων οὐδὲν μοι ἀπέφευγε, πρόσσωρον [ὁ] θεὸς ἀνθρώπου οὐ λαμβάνει—ἐμοὶ γὰρ οἱ δοκούντες οὐδὲν προσάσθενον,……* (「よつて、かの『重だった人々』からは——彼らがどんな人であったにしても、それは、わたしには全く問題ではない。神は人を分け隔てなからぬのだから——事実、かの『重だった人々』は、わたしに何も加えることをしなかった」)
- なお、パウロの召命体験にともなう特別な使命の自覚に「よつて」cf. Wilckens, U., “Die Bekehrung des Paulus als religious geschichtliches Problem” in *ZThK* 56 (1959), pp. 273—293. Stendahl, K., *op. cit.*, p. 68 et passim.

(41) 他に *λαός* などの使用も考えられるが、パウロは、その「神の民イスラエル」というニュアンスによる誤解を避けて、むしろ *ἐθνος* の語原的意味を選んだのであろう。cf. Strathmann, “*λαός* in the New Testament,” in *Kitt’s ThWNT*, IV, pp. 50—57.

(42) ガラテヤ人への手紙二章十一—十四節。そこにパウロの神学的確信の強さをみとめることはできるであらう。しかし、それはパウロにとって「キリストを宣べ伝ええる」使命の自覚の外に根ざすものではない。キリストにあっては、もはやユダヤ人もギリシヤ人もないという人間の生の根源的な立脚点を、ユダヤ人の宗教的・民族的偏見（律法の誤解）に抗して明示することこそがパウロの「キリストの福音」の基調であり、ペテロの行為は、この点をあいまいにするものであるゆえに、パウロは語らざるを得なかったのであろう。山谷省吾、『ガラテヤ人への手紙』テサロニケ人への手紙』新教出版社、一九七二年、四七一—五一頁、佐竹明『ガラテヤ人への手紙』新教出版社、一九七四年、一八八—二〇五頁参照。

(43) つまり、なぜパウロがここで「わたし自身は異邦人の使徒なのであるから、わたしの務を光栄とし」ということばをいれて十四節につないでいるのか、という理由が明らかになる。ガラテヤ人への手紙二章八節の場合と同じく、このパウロ自身の立場からの使命の確認の中には、かくされた「すべて」が含まれ、それゆえに彼はそれを「光栄」とし、また同胞の救いのために熱心であることを表明することができた。

(44) ダンカンはこのことばの英訳を“uncircumcised”とすることによって、七節との違いを無視している。また、NEBでは逆に七節の「無割礼の者」と訳られるべきところを“gentile”と訳すことによってその違いを抹消している。cf. Duncan, G., *The Epistle of Paul to the Galatians*, London: Hodder and Stoughton, 1934, p. 48; *The New English Bible*, Oxford University Press, 1961, p. 308.

## Summary

### Is Paul an apostle to "the Gentiles"?

— Some problems concerning the translation and  
interpretation of τὰ ἔθνη in the Epistle to the Romans 1:5 —

Mikio Ohgida

It is an long established idea that Paul is an apostle to the Gentiles. It is true that he worked among the Gentiles. He sometimes calls himself to be an apostle to τὰ ἔθνη in his letters.

But it is also true that he preached his gospel to "the Jews and the Gentiles." In every town he visited he would repeatedly begin his preaching at the place where the Jews met for religious activity. He considered it necessary to visit Jerusalem, even at the risk of his life, before he moved from Greece to Rome. His manner of argument in his letters reflects his strong concern for the Jews.

If Paul actually worked for "the Jews and the Gentiles" it might be argued that the meaning of "τὰ ἔθνη," when it is used by Paul for the object of his activity, involves something more than "the Gentiles." The fact that τὰ ἔθνη in the Epistle to the Romans 1:5 is translated into "the nations" in several versions might serve as an example.

The examination of the meaning structure of Pauline τὰ ἔθνη will throw light upon the sources of misunderstanding in past theological methods and will lead us to a new approach for the understanding of Paul and his religion.